平成２１年度

創生授業実施報告書

愛媛大学　教育・学生支援機構
共通教育センター

目次

前学期

１０２８７　異文化へのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
バージン･ルース(国際教育支援センター)
１０３２３　現代社会の諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
佐藤　浩章(教育・学生支援機構教育企画室)
１０３６９　自然の法則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
中川　祐治(総合情報メディアセンター)

後学期

２０２５２　異文化へのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
バージン･ルース(国際教育支援センター)
２０２５４　倫理と生き方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
秦　敬治(教育・学生支援機構教育企画室)
２０２６１　ことばの世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
清水　史(法文学部人文学科)
２０２７９　芸術の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
東　賢司(教育学部国語教育)
２０２８１　異文化へのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
ライネルト　ルードルフ(共通教育センター)
２０２８３　異文化へのまなざし・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
田中　寿郎(大学院理工学研究科物質生命工学専攻)ほか
２０３１６　くらしと政治・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
楢林　建司(法文学部総合政策学科)
２０３２２　現代社会の諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
平尾　智隆(学生支援センター)
２０３２６　現代社会の諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
藤目　節夫(法文学部人文学科)

科目番号：１０２８７	科目名：異文化へのまなざし
担当教員：バージン・ルース	
開講時期：前学期集中	受講者数：１２

平成 21 年度創生授業実施報告書
10287　　異文化へのまなざし　集中
担当教員：バージン・ルース
日程　平成２１年８月３日ー１８日

Aug. 3　Arrive in Bali stay one night
Aug. 4　Transfer to Yogyakarta
Welcome party at Gadjah Mada University (UGM)
Aug. 5　Opening ceremony and Orientation
Discussion, Campus Tour
Aug. 6　History and Explanation of KKN Program at UGM
Preparation to join UGM students in two villages
Aug. 7　Student preparation
Transfer to villages
Aug. 7~16　Home stay in villages, Introduce Japanese culture, work with UGM students on their KKN projects
Aug. 17-18　Reflection, Closing Ceremony, Farewell Party

Gadjah Mada University in Yogyakarta, Indonesia has a social innovation/empowerment program in which all students must participate. The students form groups of 10 to 20 students from different faculties and go into a village to observe, plan and work with the villagers to improve their quality of life. The students stay in the village for about 2 months, until the projects they proposed are finished. Each student must plan 5 different projects to carry out while in the village. Funding for the projects comes from local banks and businesses, the university and other sources.

12 Ehime University students joined this class. They came from the faculties of Agriculture (8), Law and Letters (3) and Education (1) and were all undergraduate students. Prior to leaving Japan 3 study/preparation sessions were held to learn about Indonesian culture. The students were divided into two groups and each group stayed in a separate village. UGM students had already been there for 2 or 3 weeks and had started their KKN projects.

UGM student village projects

In one village they were helping the villagers to make methane gas from cow manure and use it for cooking fuel. At the other village they taught the farmers how to test the pH level of the soil in order to know what kind of fertilizer would be best. Other projects included a cooking contest using healthy ingredients, a workshop for women's health and teaching children how to brush their teeth.

EU students stayed with the UGM students in village housing. They observed the activities of the UGM students and tried to participate as much as possible. Life in the village had many challenges for our students. They learned to adapt to the food, toilets, to share a bedroom with other students, to interact with villagers.

Problems

Language was the most serious problem. English was the common language and EU students tried to use Indonesian with some success. But communication was too difficult for our students to really understand about the projects of the UGM students, and therefore were not able to actively participate. But the students did learn that they could communicate a great deal through gestures, or playing games with the children, etc. At a basic level they were able to communicate.

Challenges for next year

Next year we plan to provide more background about Indonesia and the KKN program before going.

We need to provide language support in Japanese. The biggest challenge will be to find a way that EU students can participate in the KKN projects.

Review

This class was quite successful. The students all said they had a very good learning experience. One student reported that she was so impressed by the UGM students desire to help society that she changed her major to one that will more directly help people. Other students have considered studying abroad and one is planning to go to graduate school in Indonesia. It was also observed the some students learned vital lessons just by having to live with a group and adjust to the group's limitations and needs. It was an intense experience so the lessons were also intense.

科目番号：１０３２３	科目名：現代社会の諸問題
担当教員：佐藤　浩章	
開講時期：前学期集中	受講者数：１９

創生授業報告書

教員名：佐藤 浩章（教育・学生支援機構）

１．授業題目

愛媛大学リーダーズ・スクール Ehime University Leaders' School (ELS)

２．受講者数　１９名

３．重視した教育目的

受講生が自らのリーダーシップ力に対する学びの意欲を高め、自らの経験に基づいたリーダーシップと学習によって身に付けたリーダーシップを融合させ、今後の学生活動や自分の所属する組織、社会においても役立つリーダーシップ力を身につけることを目的とした。

４．設定した到達レベル

・積極的でインタラクティブな人間関係を築くことができる。
・リーダー、サブリーダー、フォロアー、など組織内役割を理解し、それぞれに相応しく振舞うことができる。
・他者の発表（プレゼンテーション等）に対して適切な評価を行い、効果的な助言を行うことができる。
・グループ課題において、討論や準備作業に積極的に参加して、グループに貢献することができる。
・自らが設定するリーダーシップに関する調査を、文献等使って的確に行い、その成果を他者に分かりやすく口頭で説明することができる。
・分かりやすい説明のために効果的な発表資料を作ることができる。
・リーダーシップに必要な能力に関する文章をわかりやすく、的確に書くことができる。
・現在の自分を理解するために、自らの過去を客観的に分析することができる。

５．授業を進めるにあたって特に留意した事柄

・積極的に批評し合う仲間づくりのための環境設定

学生自らが講師となる個人セミナーにおいて、講師側と、受講者側のどちらにも学び・気づきを得られる場を設定した（振り返りの場、討論の場、対話の場の設定等）。セミナー受講者は、講師の良かった点・優れていた点はもちろんのこと、より良いセミナーにするために改善すべき点を指摘する。その際、指摘をする側には相手の立場を考えながら、相手が受け入れやすい表現方法を考えながら指摘することを促し、指摘を受ける側には、その指摘に対して積極的に受容する態度を持つよう促した。

・受講生全員ができるだけ多くの仲間と関わり合うために、授業ごとにグループを組み替える、あるいは授業中においても積極的にグループ替えを行うなどしてコミュニケーションの活性化を促した。
・受講生に対して、担当スタッフへの積極的な関わりを促した。これは、学生が、授業だけでは対応できない悩みの相談を行い、授業のモチベーションを保つために必要であるからである。

・個人面談を一人につき１時間程度行い、受講生の目的意識を明確にし、受講生のニーズ把握に努めた。

６．学生の反応

・授業アンケート結果を見ると、95%の受講学生が「有益であった」「やや有益であった」と回答している（回収率96%）。
・授業に対して真剣に取り組む学生が多く見られ、また授業時間外学習においても積極的に学生活動スペースを活用した個人学習、グループ学習を行う姿が見られた。
・最終授業で行った2分間スピーチでは、「受講を通して自らの成長を実感している」や、「他者との関わり方を真剣に考えることができた」など、受講の成果を確認できるスピーチを聴くことができた。
・授業終了後もＥＬＳ修了生として頻繁にスタッフルームへ足を運び、学生から発信するイベント等の企画・立案に活躍している。

７．総合的判断

「リーダーとしての知識、スキル、態度」の涵養という目標が、学生の自主性に大きく貢献した。所属する組織（サークル、バイト、学生活動等）を引っ張る者としての自覚、もしくは将来的なリーダーを目指す意欲から、リーダーとしての知識、スキルに対して受け身ではなく主体的に学ぼうとした姿勢は、授業への積極参加として評価できる。（出席率：96%）

また、本授業では、受講生の自分自身への振り返りを重視している。様々な教育手法を用いることによって、自分自身に足りないもの、人とコミュニケーションを取る上で必要なこと、今後の自分自身の方向性などについて深く考えるとともに、自己認識を促すのに役立った。

さらに、「リーダー」「リーダーシップ」というキーワードで繋がった、意識の高いメンバーが集まることによって、互いが批評し合える環境を作ることができた。このことは、授業アンケートの「皆さんの熱意がすごく多くの刺激を受けることができました」「熱い思いを持った仲間に出会えてよかった」などの記述に表れている。

そして、授業終了後においても、これまでの受講生や今回の修了生が中心となって、積極的にチームを作りイベントを企画、立案、実行していることや、学外からも協力を要請されている（愛媛新聞とのコラボレーション企画実施中、商工会議所との連携企画中）点は教育目的にも当てはまるものである。

８．今後に向けた改善点

・本授業は、授業終了後も修了生として関わる学生が多数いるため、修了生に対するプログラムアンケートを実施し、今後の授業改善に役立てる（現在アンケート配布・回収の最中である）。

科目番号：１０３６９	科目名：自然の法則
担当教員：中川　祐治	
開講時期：前学期集中	受講者数：１７

【科目番号】１０３６９
【授業題目】自然の法則（自然認識学）
【履修者数】１７名
【日程】平成２１年９月７日（月）～９日（水）２泊３日
【場所】国立大洲青少年交流の家
【重視した教育目的】
　環境教育の一分野である自然認識学の立場から、五感を使って自然を直接体験することで自然を共に分かち合うことを学ぶ。
【設定した到達レベル】
　自然認識学の代表であるネイチャーゲームの理論を学び、複数のアクティビティを経験することでネイチャーゲームの基本理念を理解し、さらに新しいアクティビティを創作し実施する。
【授業を進めるにあたって特に留意した事柄】
- 参加者が決定してから集中講義を実施するまでに約３ヶ月あるので、専用のメーリングリストを開設し事務的連絡や参加学生同士の情報交換に利用している。
- ネイチャーゲームの指導員資格を有するアシスタントが必要なため、担当教員の自己負担で県外の「ネイチャーゲームリーダー養成講座」へ学生を連れて行き資格を取得して貰っている。
- 初日の夕食を野外炊飯とすることで、受講学生の交流を図っている。
- 大洲青少年交流の家のフィールドをフルに使うため下見を含めた事前準備を綿密に行っている。
- 教室での講義と野外活動を交互に行うことで、緊張感を保ちつつネイチャーゲームを体験することができるようにした。

【学生の反応】（最終日の自由記述アンケートより抜粋）
- フローラーニングの概念は他のイベントでも役立つこと間違いありません。
- この講義を通して久々に様々な物に興味を持つことができました。
- 自然に対する新たな発見をすることができました。
- 自然との一体感を経て、自然がいかに必要であるかということを身に感じた。
- ３日間で今まで知りもしなかったたくさんの“自然”を感じました。
- 自然や五感に対する新たな考え方を得ることができました。
- 普通に生活していては絶対に経験できないような体験をすることができて、この講義に参加して良かったと思っています。
- これから自然をどんどん好きになって行き、大切にして行く必要があると感じました。
- この講義で人間にとって自然は大切なものだと感じた。

【総合的にみてうまくいったかどうか】
　最終日にネイチャーゲームの基本理念を理解した上で新しいアクティビティを作り出し実施するという高い目標を設定し、その結果非常に優れたアクティビティを創作する事ができている。

【今後に向けた改善点】

新しく創作されたアクティビティの中で、最も優れたものを(社)日本ネイチャーゲーム協会に申請する。

以上

総合情報メディアセンター　中川祐治

科目番号：２０２５２	科目名：異文化へのまなざし
担当教員：バージン・ルース	
開講時期：後学期金曜日２限	受講者数：２５

平成21年度創生授業実施報告書
２０２５２　異文化へまなざし
Intercultural Communication
担当教員　ルース　バージン
Schedule:
10/2 Orientation
10/16, 23 Case Studies: Cultural or Personal?
10/30 Different methods of communicating
11/6 Group discussion
11/20 Interview with foreigners
11/27 Group discussion
12/4 High Context vs. Low Context Communication
12/11 Cultural Features Checklist, Phases of Culture Shock
12/18 Case Study
1/8, 22, 29 Group work on projects and final reports
2/5 Final Reports

This class was offered for the first time in the second term of the academic year of 2009 because Ehime University is placing more emphasis on internationalization and communication skills are very important when dealing with people from other countries. It was offered in English in order to provide students with more opportunity to actually use English and it was felt that the content and vocabulary used would not be too difficult to understand. The English ability level of the student was not set but about 5 students dropped out after the first class because they could not understand. Two international students joined the class, which made the class itself an intercultural exercise.

Emphasis was placed on the fundamental problems of communicating with people of different cultural backgrounds. The students learned about deeper issues such as power distance, the concept of time, high/low context communication, etc, which create more problems than whether one eats rice or pasta. The style of the class used a great deal of discussion to that students could learn from each other and work together to come up with solutions to communication problems. For the final reports students chose between interviews with foreigners and an intercultural lesson plan.

科目番号：２０２５４	科目名：倫理と生き方
担当教員：秦　敬治	
開講時期：後学期水曜日２限	受講者数：６０

科目名：倫理と生き方　授業形態：主題別セミナー
担当教員：秦　敬治（教育企画室）

平成２１年度後学期に担当した、「倫理と生き方」について以下のように報告いたします。

Ⅰ 授業題目　ライフマネジメントとセルフ・リーダーシップ
Ⅱ 履修者数 ６０名
Ⅲ 重視した教育目的
学生が、自らの人生観、生きる目的や夢の実現、家庭と仕事の両立、恋愛と友情等の重要性を知ることにより、自分の生き様を確立し、その生き様を全うするために学生時代の学びや生活がいかに大切かを理解する。
Ⅳ 設定した到達目標
① 現段階で目標となる一生を通じた自らのライフプランを構築できる。
② そのライフプランが自分の生き様や大学生活と、どのように関連しているかを説明することができる。
③ セルフ・リーダーシップに必要な3つの能力を説明できる。
Ⅴ 授業を進めるにあたって留意した事柄
この授業では、講義を通してライフプラン、生き様、生きる目的や夢の実現、仕事、恋愛、家族、友情、趣味といった、人間にとって大きなテーマの重要性を認識し、それらを自己に引き付けてじっくり考え、また他者との対話を繰り返しながら、自己の考え方を明確にしていくプロセスを重視している。そのため、テーマに応じて音楽を流し、グループ・ワークを行う際には、アシスタントが必ず関わり、話し易い雰囲気作りや、互いに配慮した話し合いが行われるように支援を行った。更に、学生が様々な価値観や考え方に触れることが大切であると考え、ゲスト・スピーカーを複数招き、それぞれのライフプランなどについて語ってもらった。また。学生の授業内容への理解と自己洞察を促すために、学生が毎回提出するレポートに、教員またはアシスタントが必ずコメントを返し、６０名という大人数ながらも、双方向の授業を心がけた。
Ⅵ 学生の反応
家族や恋愛、そして将来の夢など、個人的なテーマについて話し合う場面が多いため、活発な対話が生まれるか懸念していた部分があった。しかし、始めは話し合いに加わることを躊躇する学生が若干見られたものの、回を重ねるにつれ、学生のレポートには、他者の考えを知ることの面白さ、自己の考えを伝えることの楽しさ、そして自己に対する新たな気づきなどが多く綴られるようになった。そして授業の最後には、９４％の学生が自己のライフプランを作成し、他の受講者の前で発表することができた。
Ⅶ今後に向けた改善点
・授業時間外学習として「各テーマをもとに、自らや友人・家族などと人生について語り合う時間を持つ」と示しているが、今回は特にこれに関してレポートなどを課すことはなかった。しかし、この授業で取り扱うテーマに対する理解や、自己の考えは、そのテーマについてどれだけ多くの人と言葉を交わしたかによって深まり方が異なると言っても過言ではないため、次回は課題として取り入れることを検討してもよいだろう。

科目番号：２０２６１	**科目名：ことばの世界**
担当教員：清水　史	
開講時期：後学期月曜日１限	**受講者数：２９**

科目名：ことばの世界 授業題目：大学生のための日本語ラーニング
担当教員：清水 史（法文学部人文学科）受講者数：２９名
対象学生：知の展開科目A受講者数29名（法文21名、教育1名、理3名、農2名、SSC1名）

◆重視した教育目的

日本語を意識化、対象化する方法を学ぶことによって日本語の特性を理解するとともに、大学での学究生活を円滑にするための日本語表現のルールを習得することを目的とする。

◆設定した到達レベル

シラバスに掲げた＜到達目標＞は以下のとおり。
（１）日本語を内省できる能力を高めることができる。
（２）レポートや論文作成のプロセスを的確にデザインすることができる。
（３）論理性と批判的思考力を身につけている。
（４）リソースをネットワーキングする方法を習得している。
（５）達意の文章を作成する極意と口頭発表のコツを習得している。

◆授業を進めるにあたって特に留意した事柄

○２回目の授業時に日本語運用能力４級（ネイティブ用）程度の日本語力試験を実施し、受講生の状況　を把握するとともに、14回目の授業時に本講義でのスキルが身に付いたかどうかを確認する試験を実　施し、授業の成果を分析することとした。
○ピア学習が効果的に行われるよう７班編制（４人一組）にした。班編制にあってはなるべく学部の偏　りがないように留意するとともに、留学生のいる班のみを５人編成とした。
○日本語の基本と特徴が理解できるようなビジュアル教材を作成し活用した。目で見て分かるのがコツ。実例に即したエクササイズを用意した。
○授業にあたっては、＜スキルの習得→活用＞という点に留意して授業を進めた。

◆学生の反応

最終回にアセスメント・シートに記述してもらったところを以下に紹介する。

○グループ・ワークについて

１）グループ・ワークで他の人の意見を聞くことができたし、留学生の考えなども知ることができてよかったと思います。（法・総）
２）グループ・ワークが特に印象に残っています。他の人の意見を聞くことで自分の意見を見直したり、新たな考えが生まれたりして、ためになりました。（理）
３）小テストやグループ・ワークなどです。色々な人の意見や考えを知れて楽しかった（法・総）
４）自分の考えなどをグループ内で話し合って、皆でまとめるのが印象に残りました。（農）

▼清水コメント：受講生が２９人であったので、グループでのピア学習が非常にうまくできた。４人をひとつのグループとして、７グループを作り、グループ内でのディスカッションを通じて、意見をまとめ、その意見をさらに全体で吟味することができた。日本語に対する意識化、対象化が話し合いの中で形成　されていく様子が見て取れた点は非常に効果的だったと思います。 アセスメント・シートの「グループ・ワークでは積極的に発言しましたか」の問いかけに、全員がYESと回答している。

○授業の効果

1）今までの自分の文章をふり返ると、講義で悪い例として挙げられたような文章をぜったいに書いていたと思います。これからこの講義で学んだことを活かしてレポートを作成したいと思います。（法・総）

2）今後の大学生活で必要となるスキルを他学生より先に学べたので、この授業を受講していない友人に教えてあげようと思った。有意義な授業をありがとうございました。（法・総）

3）文章を書くとき、引用の部分があったら、どう書くのかよく分からなかったが、引用の方法や引用文献の記載方法について一番印象に残りました。（法・文・留学生）

4）レポートの書き方について学べたところが一番印象に残りました。今回学べたことをレポート作成に活かせるように努力します。（法・文）

5）違和感のある文章を正しくリメイクする作業が難しかった。しかし、その作業を繰り返すことで、日本語のスキルが身に付いた。（法・総）

6）修飾語の配置の仕方にルールがあるのだということを知り、自分が文章を作るとき、自然とルールに従ったやり方ができるようになったのではないかと思いました。（法・文）

7）自分の日本に対する知識が乏しいことに気付くことがよくあった。日本語を母語として話しているが、その特徴や欠点については知らないことが多く、日本語というものを改めて考えることができてよかった。（法・総）

8）これから気をつけて日本語を使いたいと強く感じました。（農）

9）文章を書くときの基本を学べてすごくよかった。これからレポートを作成するときは、この授業で習ったことを実践していきたい。（理）

10）文章を書くときの基本的なルールを知らなかったことが印象に残った。しかし、それに気づき、改善できたことは、この授業の大きな収穫であり成果だ。（農）

11）レポートを書くルールが全く分かっていなかったので、この授業に習い直せてよかった。「要約しよう」の回がとくによかった。これから文章を書く回数が多くなると思うので、自分にとってとても実りのある授業だった。（法・総）

12）「ワンワード・ワンミーニング」や「直結のルール」など、文をスマートに構成する方法がとっても印象的だった。今までの自分の文の見直すべき点が明確になったと思う。（理）

13）日本語の正しい書き方を学ぶことができて良かった。客観的に日本語をみてみる機会がありとてもおもしろかった。

14）今まで思いのまま文章を書いていた。言葉の係る所をはっきりと明示する文章を教えてくれたこと。（SSC）

▼清水コメント：授業時に行った小テスト及び成果判定試験の結果から見ても相応の成果が上がったと思量される。授業進行の留意事項でも触れたように、スキルの習得後にそれを演習形式で実践する方式は非常に効果的であった。

○授業への要望

1）グループ・ワークは日本人が１人だけだったので大変でした。中国人の方々を１つの班にまとめなくても良かったと思います。（教）

▼清水コメント：留学生のグループを特立したのには訳があります。母国語を共有する者同士で日本語について話し合うことが必要だからです。たしかに一人だけ日本人だったのはまとめるのが大変だったと思いますが、それだけに日本語を対象化するコツが掴めたはずです。

○その他

1）パワーポイントを使っての説明だったので、分かりやすかったです。（理）同様意見多数あり。

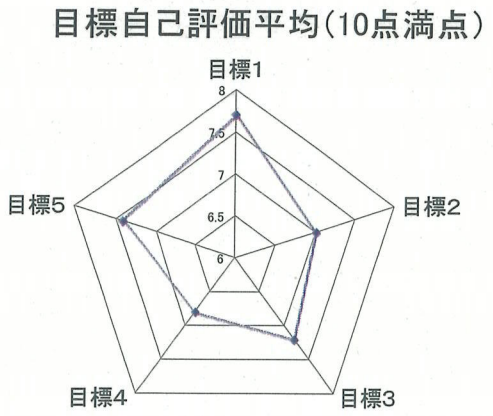
2）とても楽しかったです。日本語がもっと好きになれました。（法・総）

3）常に緊張感を持たせて興味を持てる内容。メリハリの効いた授業進行が良かった。（農）

4）この授業を選んだことに満足している。（法・文）

◆総合的にみてうまくいったかどうか

シラバスに掲げた５つの＜到達目標＞のそれぞれについて、最終回に受講生10満点で自己採点してもらった。以下のグラフはその結果の平均点である。



全体の平均点は７．２２点。それぞれの目標に対して７割方の点がついているところから判断すれば、概ねうまくいったといえるのではなかろうか。アセスメント・シートの「この授業を通して、基礎的な日本語のスキルが分かりましたか」の問いかけには、「よく分かった」が６名、「まあまあ分かった」が１９名と肯定的な評価を得ることができた（４名欠席）。左のグラフでは、目標４の「リソースをネットワーキングする方法を習得している」の平均が６．８点と他の目標の平均点より下回っているが、この単元については、マッピング法の教授等、もう少し時間をかけてもよかったかもしれない。

「日本語ラーニングの上級編があったら受講したいと思うか」の問いかけには、２５名が Yesと答えていた。高年次での日本語科目の開講を考えてみたい。

◆今後に向けた改善点

以下のような改善策を講じたい：

１）ピア学習の効果をより引き出せるよう、先輩SAの活用等を考えたい。
２）e-Learningによるビジアル教材を開発し、時間外学習の一助としたい。
３）日本語ラーニングの学習到達度を客観的に測定するために日本語検定３級受検を導入したい。
４）附属高校との連携による教材開発と人材提供について相談したい。

以上

科目番号：２０２７９	科目名：芸術の世界
担当教員：東　賢司	
開講時期：後学期金曜日２限	受講者数：２９

創生科目報告
科目名：芸術の世界
受講生：２９名
授業者：東賢司(教育学部国語教育講座)
目的：東洋の文化の一つである「印」に注目し、石を使用して印を作る行為（篆刻）を体験する。
授業概要：東洋には文化人の教養として「書・画・篆刻」という必須の素養を求められていた。その篆刻の元々の形であるが、中国古代の紀元前の時代から使用された「銅印」にある。印の文化も東洋独自の文化であり、大変歴史が長い。この講義では、東洋文化の一つの篆刻作品の作成を経験し、芸術的な教養を広める。
創生科目として、長く登録をさせていただいておりました。少人数での授業を行うことができ、個別指導がしっかりとできました。石に文字を刻すという作業を行うことが中心になり、刃物を扱うことが中心となるために、けがのないよう講義を行うことが最も重要なことであると認識しておりました。以下、成果と問題点について挙げさせていただきます。
〇ものを作ることへの興味
この講義で作成したものは1cmから3cmほどの石に文字を刻むことである。年賀状を作る時に、消しゴムにカッターナイフを用いて文字や絵を刻むことと同じであるが、用いるのは石である、そう簡単にはいかない。「方寸の世界」と言われる小さい空間に自在に文字を刻むことができる喜びが味わえたことは、ものつくりへの興味を持たせるきっかけになったのではないかと感じている。
〇伝統的な書体を体験する
篆刻とは篆書で文字を刻む事である。篆書は今の時代では使われなくなった書体であるが、漢字の「表意性」を反映している書体であり、元々の漢字の意味を知るきっかけとなる。最初は、角張った文字に抵抗感もあったようだが、その理屈を説明すると、積極的に字体選びに取り入れるという学生も見られた。
●専門ではないという意識
本年の受講生は、相対的にはまじめに授業に参加し、作品作りに取り組んでいる。講義も1度も欠席していない学生も多くいた。ただ、中には遅刻も欠席も多いものがおり「学部の専門科目でもこんな状態なのだろうか。」と思う学生もいた。共通教育が抱える根本的な問題であろうが、「大学生にとって教養がいかに大切か」ということを知らしめる機会が少なすぎるのではないかと感じる。
☆別に
教室の問題など、共通教育の事務担当の皆さんには、多大な迷惑をおかけしました。おもしろい授業をしたいと考えて、数年間篆刻をテーマに取り組んできましたが、「共通教育で芸術活動を行うことは難しい」という結論を得、来年度以降はテーマを変更することにしました。

科目番号：２０２８１	科目名：異文化へのまなざし
担当教員：ライネルト・ルードルフ	
開講時期：後学期月曜日１限	受講者数：３２

20281 創生報告書　2010 年 3 月 1 日　Rudolf Reinelt

I. 項目 科目名：*異文化へのまなざし*

1. **授業題目**:外国の現状を日本に広める -第二外国語/未習外国語を目的語とする国を愛媛県民･企業などに広める-　- Informing Japan about foreign countries - Informing Ehime and its businesses about countries with other target languages
2. **履修者数**: 32 名

3. 重視した教育目的 〈シラバス〉授業の到達目標

この授業を受けた学生は、未習外国語の初級段階が身につく上、その言語を母国語とするその国の自画像をある程度理解することができる。更に、その国の現代の特徴を知ることで、愛媛県民、及び企業にそれらの要点を紹介したり、分析したりすることができる。

4. 授業の目的（設定した到達レベル）

1. 始めに、学生は英語以外の外国語（ドイツ語）の初歩を３つの観点（目的言語のコミュニケーション、人間情報交換、数字という三つの観点）から学ぶ。
2. 学生はその国についての情報等取得方法を学んでから、実際に調査を始める。
3. 学生は学んだドイツ語、及び調査したドイツについての情報を取捨選択し、それらを愛媛県民及び企業などに紹介する。
4. 学生は紹介した結果（反応、手応えなど）を報告書として作成、人の報告の評価方法を学び、フォローアップを試みてから、全体についての簡単な分析を行う。

5. 授業を進めるにあたって特に留意した事柄

シラバス（授業案内）と受講生の希望（初回アンケート）の両方に沿うために、次のような流れになった：

シラバス　（愛大 HP）－＞　初回アンケート（追加１）　－＞　（以下の詳細は報告書（長い方）参照）両方に合うように改善　－＞　ドイツ語会話と資料を自立に探す—＞　ドイツの都市について調べる　＞　真の国際体験（可愛くない面も含めて）—＞　会社など訪問　（記入のため外部サーバーを用意、報告書の書き方、評価の仕方）　—＞　報告　－＞　ピアー評価　－＞　ドイツ文法〔一通り、名詞変化１と４格だけ〕－＞ドイツにおける簡単な場面　＞　自己紹介　＞（資料無しで）　（ドイツ語で）口頭試験 2 分 ＞　筆記

6. 学生の反応

—授業内容及び形式などが５－１５分ごとに変わるにもかかわらず、途中で寝る学生がいる　（授業は月曜ー）。

ー隣の人と会話がとれない･とらない学生はいるが、相手を指定すればきちんと練習する。

—自立に補助教材メディアを使用するのは求めすぎたこともあった。

—真の異文化体験（可愛くない面も含めて）

—シラバスどおり：愛媛県民及び企業などに紹介する（県に関係ない）

7. 総合的にみてうまくいったかどうか

目標設定したものは、つまり、口頭試験、訪問、報告書は出来た。また、受講生はＭｏｏｄｌｅなど補助的な教材メディアを目的に合わせて使用することができたと思う（ライネルト研究室開発無記名アンケートにより）。
初回アンケートに記入していただいたように口頭：ドイツ語会話を授業中４－５分（試験２分）出来ても満足していない及び後輩に推薦しない受講生が多い。
外国語学習の方法・習い方など様々な事を紹介した結果、（外国語）ドイツ語口頭中心でもないのに、受講生は母国話者によって評価を受け、そして素晴らしい結果を出した。試験では２－3 分話せるようになった。
全体としてみたら。。。
憲章に上げた“安心”は外国語習得には存在しないので、その面を基準とすると、この授業は失格であった面もある。

8. 今後に向けた改善点

シラバスと受講生の希望の両方に沿うのは難しい。
つまらない訳読と訪問（可能か？）だけ又は会話だけ（初回アンケートのように）にしたほうがよさそうに見える。
受講生の意見では“文化について学べて良かった”と“文化について習っていない“の極端に分かれる。異なる意見があったので実験的な部分を貫くしかないが、基本（この場合ドイツ語会話）とその様子を正しくすると、少なくとも客観的（実証できる）結果となる。

9. 愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ

外国語学習は中学校・高校英語のような“お勉強”の対象だけではなく、慣れていない、自分に合わないが新しい文化なども含めていることを紹介する必要がある（ことが再度確認できた）。
他の外国語の授業も学生の生活環境に結びつけたら。。

追加１）　アンケートまとめ　＜初回アンケート＞

○この授業で習いたいものは何ですか
・ドイツの文化や習慣、コミュニケーション
○これを達成したら満足します
・ドイツ語のネイティブの発音、文化
・文化・歴史をおもうぞんぶんに知ること。
・基本的なドイツ語。ドイツの文化、習慣を知る
・日常会話

○これはこの授業ではやりたくない
・プレゼンテーション
・難しい文法、難しいドイツ語
・専門用語
・多くの宿題
・今回のドイツ語の教え方
・歴史、芸術
・テスト

追加2）＜Moodle & AcMアンケート意見欄＞
意見欄から
-大変難しい授業であったが、楽しかった。
-ドイツ語を初めて学ぶ人にとっては、少し分かりにくかったと思います。先生の一生懸命さ、ドイツ語を楽しんでほしいという思いは伝わる授業でした。楽しかったです。Danke!!

追加3：訪問、資料、評価の一例（省略）　評価の基準・用紙

報告者F	″取締役専務と話しました。結婚式について１時間ほど話しました。新しい発見があり、ドイツも含めた色々な文化を取り入れていきたい、と言っていた。とても良い雰囲気だった。これからは色々なアイディアを出していきたい。	Managing Director sagte er.1 Stunde sprach über die Hochzeit.Es gibt neue Erkenntnisse einschließlich der Farben die wir wollen die deutsche Kultur zu übernehmen sagt er.Die Atmosphäre war sehr gut.Jetzt möchte ich verschiedene Ideen."

Kriterien 基準	Bericht（報告書）_F_	日本語のヒント	Antwort （役 RR）	Kommentar コメント

追加４：Active Mail の例

調べたドイツの都市の市長の名前を報告する:　メール番号:85 ==== 件名 : 20281Mo1/9104209 / Der Buergermeister von Glucksburg heisst Bernd Albrecht 41 (Sun, 24 Jan 2010 23:01:33 +0900)

送信者: comet [komet-lent@lib.e-catv.ne.jp]

宛先 : molibunk@mails.cc.ehime-u.ac.jp

科目番号：２０２８３	科目名：異文化へのまなざし
担当教員：田中　寿郎　ほか	
開講時期：後学期火曜日１限	受講者数：８

平成 21 年度創成授業報告書

授業科目名　：異文化へのまなざし

授業題目　：Challenges and Issues in Research Today (in English)

開講時期　：後学期　主題科目火１科目帯

（人文一、看護学科一、環建一、能材一、応化一、情報一）

企画担当　：バージン･ルース, ボグダン・デイビッド・リチャード,土屋由香,田中寿郎

受講者数　：日本人学生　8名

International Students　5名

１．講義の目的

この講義には、授業を提供する教員側の目的と、受講する学生側の目的との二つの目的がある

まず、教員側の目的は、英語で講義を行う必要性を感じている教員、あるいは英語で講義を行うスキルを身につけたい教員に対して、そのトレーニングの場を提供することである。現在、大学あるいは大学院では講義を英語でおこなうことが求められてきている。

多くの日本人大学教員は、専門分野での研究発表や国外の研究者との共同研究、さらに在外研究などを通して、英語を使ったコミュニケーションに不自由することはない。しかし、英語を用いた講義を行う経験を持ち合わせておらず、英語で講義を行うためには、トレーニングが必要である。そこで、試験的トレーニングの機会としての講義を設けることとした。

一方、学生側の目的は、科目としての英語ではなく、コミュニケーションツールとして実際に活用する環境を提供することである。英語のみで行われる講義を聴講することで、知的な刺激を得ること。さらに、愛媛大学の各学部から様々な先生方にそれぞれの研究分野について分かりやすく話をしてもらうことにより、学問の深さや広がりを実感してもらうことが期待できる。

２．授業を進めるにあたり、特に留意した事項

初めて英語で講義をすることを想定して、参加いただく先生がたに、参加し易い環境を作るために、いくつかの配慮を行った。なお、教室で使用する英語については、必要に応じていくつかの参考書を紹介した。

①講義は1回90分とする。90分以内であれば、さほど準備に手間もかからず、気軽に参加できる。

②講義内容は研究に関連する内容とする。研究に関連する内容であれば、ある程度講義を行いやすいと考えた。
③対象学生の学部を特定しない大学入学生とし、講義内容について専門的知識を持たない学生が理解できるレベルを基本的内容とした。
④講義中に実験を交えても可能とするために、愛大ミューズに新たに設置された多目的実験室を利用することにした。
⑤学生に専門用語や内容について、事前に知っていてもらうために、Pre-Printを用意して、講義の1週間前に配布するようにした。
⑥留学生にできるだけ聴講してもらうよう依頼した。

３．講義の実施と成績評価

講義のスケジュールは、第1回目に講義全体のガイダンスと受講生の間のアイスブレーキングを行った。2回目から7回目までは、参加した先生がたに講義をお願いした。8回目にミッドタームリフレクションを行い英文のレポートを提出し、採点を行った。その後9回目から14回目までは、先生方の講義をお願いしたのち、15回目にまとめを行った。学生に配布した講義案内とスケジュールを示す。

成績は、講義への参加状況とレポートの点を加味した。

Challenges and Issues in Research Today
Tuesday 1st Period
Laboratory 3, 3F Aidai Muse Building

Class System
Each class will be taught by a different professor. The week before the class, you will get a short summary and vocabulary list in English to help you prepare. Please read the summary and learn the words before coming to class.

At the end of each class you will be asked to fill out a short survey.

Evaluation
You will be evaluated on your participation in class and two short reports.

Participation	40%	Asking questions, responding to questions, actively take part in discussions, etc.
2 One-page Reports	30%	One will be due at mid-term and one at the end of the class. (One report is worth 30% of your grade.)
		Handing it in on time 10%
		English usage (Is it understandable?) 10%
		Write about what interested you about the topic and why 10%

Office Hours
Please contact each professor before or after class. If you have a general question, please email Prof. Tanaka at: tanaka.toshiro@eng.ehime-u.ac.jp

Challenges and Issues in Research Today
Tuesday 1st Period
Laboratory 3, 3F Aidai Muse Building

	Date	Name	Faculty	Topic
1	10/6	Bogdan/Vergin		Introduction
2	10/13	Toshiro Tanaka	Engineering	Superconductivity: Principle and Its Applications
3	10/20	Yuka Tsuchiya	Law and Letters	Cultural Cold War and CIE Films
4	10/27	Global Studies Students	Law and Letters	Field-work Report: Interviews with Ethnic Minorities in the U.S.A.
5	11/10	Yasunori Murakami	Science	Evolution of the Brain
6	11/17	Shinako Imaizumi	Law and Letters	Enjoy Soseki Natsume's *Botchan* in English and Japanese: from linguistic points of view
7	11/24	Kobayashi Naoto	Medicine	iPS cells and Regenerative Medicine
8	12/1	Bogdan/Vergin		Midterm Reflection
9	12/8	Emi Takeyama	Agriculture	Sustainability of Paddy Fields in Japan
10	12/15	Kobayashi Osamu	Agriculture	Education for Sustainable Development
11	12/22			
12	1/19	Hideyuki Kurita	Law and Letters	Natural Resources and Development: Why do natural resources always disturb development?
13	1/26	Takuya Tsuchiya	Science	Bubbles and Mathematical Science
14	2/2	Motoyasu Takahashi	Law and Letters	To be announced
15	2/9	Bogdan/Vergin		Reports

４．学生の印象

日本人学生からの印象について、代表的な印象をまとめると次のようなものであり、聴講した学生の印象は非常に良いものであった。

・様々な分野のお話が聞けたこと
・先生方のタイムリーな研究について聞けたこと
・留学生の友人ができたこと
・思っていた以上に英語がしゃべれない自分に気づかせ、もっと勉強したいという気にさせてくれたこと
・英語が聞ける機会が増えてとてもうれしいです。また、たくさんの違った授業がきけたこと。

さらに、学生からは講義を良くするために、次の提案がなされた。

・少人数（今回はたまたまかもしれませんが）だったことを生かして、もっと生徒同士のコミュニケーションが多くとれる授業にすること。たとえば、グループワークを取り入れて、今回のように実験室が教室であれば、簡単な実験を英語で行ってみるのもおもしろいのではないか。
・レポートの内容を生徒同士で共有する（数人とだけでも）と、受講生同士の理解も深まって、授業においてもより良い雰囲気が生まれるのではないか。

５．教員の印象

講義を担当した教員の感想から、代表的なものをまとめる。

・英語を使うことで、意識せずに講義の構成や教材の選択など日本語の講義に比べてはるかによく準備を行った。
・講義中の学生からのレスポンスが良く、講義を楽しく行えた。
・初めて英語による講義を行ったが、一度経験することにより、今後英語を用いた講義でも、なんとかできそうな気がした。
・とにかく、講義が楽しく行えた。機会があったらもう一度担当したい。
・留学生がとても積極的に参加してくれた。それに日本人学生も引きずられ、講義に積極的に参加したのが良かった。

６．自己評価と来年度の実施について

この講義の目的は、教員に対しては英語を用いた講義を体験する場を提供し、学生に対しては、英語を道具として使用することを体験させることであった。教員と学生がこの講義に対して感じている印象が非常に良いことから、初期の目的は達成したものと評価できる。したがって、平成22年度も開講する予定で準備を進めている。特に、学生から強い申し出があったグループワークや討論の時間を十分にとることとした。従来90分の講義していたものを、50分程度の講義と40分程度の討論やグループワークの時間に分けるとともに、講義室を共通教育 ｱｸﾃｨﾌﾞ・ﾗｰﾆﾝｸﾞｽﾍﾟｰｽ（2）に変更し、グループワークや討論を行いやすい環境を準備した。今後の問題として、成績評価法の確立が検討課題である。

一方、この講義を実施することにより、初期には予期していなかった重要な効果が見いだされた。

①教員自ら授業改善を行う。
英語で講義を行うために、90分の講義の組み立てや学生に分かりやすい話し方、さらに、講義資料について厳選することを自然に行っていた。

②講義に学生を参加させる試みが自発的に行われていた。
学生の理解状況や、議論の時間を設けたり、各先生方が自然に学生を講義に引き込む努力を行っていた。

③交換留学生へ英語による講義の提供
今回法文学部の交換留学生が聴講した。従来であれば、日本語の講義で単位を取得することになるが、今回の講義により、母国語である英語で聴講でき、単位も取得できた。日本語の講義ばかりの中で、英語で聴講できる科目があることは、学生にとっても気が休まり好評であったと聞く。英語で行われる講義がいくつかあることは、今後増加する留学生のためにも必要であることが分かった。なお、来年度は、前・後期に異なった科目として開講し、留学生には年間4単位は英語で単位の取得できる科目を提供することを予定している。

科目番号：２０３１６	科目名：くらしと政治
担当教員：楢林　建司	
開講時期：後学期月曜日１限	受講者数：３６

科目名：くらしと政治　授業題目：難民問題についてのワークショップ
担当教員：楢林建司（法文学部総合政策学科）
受講者数：３６名

①受講登録者３６名のうち、法文学部が２７名、教育学部が３名、医学部が３名、理・工・農の各学部がそれぞれ１名ずつであった。そのうち、「評価しない」を付けたのは、法文が４名、理学部と工学部が各１名である。性別は、男性が１４名、女性が２２名である。

②グループワークは、全体として文系学生主導で進んだが、ディベートやプレゼンにける論理的な緻密さ等の点で、理系学生も随所できらりと光る貢献をしてくれた。

③第６回の授業時に行ってもらった「中間期ふりかえり」により、時間外学習を促進し、授業時間における活動を効率化する必要性が明らかになった。そこで、宿題の量をやや増やすとともに、宿題と授業の関連性をできるだけていねいに説明するよう心がけた。

もっとも、「国連 UNHCR 協会の HP にアクセスし、ケニア・ダダーブ難民キャンプ学校教育ビデオ（前編・中編・後編、計１０分程度）を視聴する」という宿題につき、やってきたか否かにつき挙手させたところ、「やってきた」と手を挙げたのは２名だけであった。 逆に、第９回で行ったディベート、第１３・１４回で行ったプレゼンについては、少なくとも直前に、時間外に集まって準備をする班がほとんどであった。

授業時間外学習については、かなり強い動機付けが必要である。

④授業アンケートについては、第１５回の授業時に１０分ほどの時間をとって携帯電話で入力させた。回答率は５６％で、他の授業と比べれば高いとのことだが、教員が期待していたほどの率ではなかった。

以上

ミッドターム・スチューデント・フィードバック（中間期の振り返り）学生コメントシート
ご利用者名：楢林建司先生　コンサルティング実施日：2009年11月9日（月・1限）　授業名：くらしと政治

学生コメント	共感する 現状維持	共感する 学期中に改善	共感する 学期中に改善不可	共感しない	教員コメント
教育方法					
双方向					
教員が一方的に話すのではない（2）					
みんなの方を見て話してくれる					
教室を歩きながら、生徒の動向に注意をしてくれている点					
質問をしたときに一緒に真剣に考えてくれた					
質問に対して、丁寧に答えてくれる					
あやふやなことはしっかり調べてから伝えてくれる点					
効果的な学習になっている					
グループワーク					
グループワークという授業は参加型で、自分たちで考えないと行けないので、講義を聞いているだけの授業より意見が持てるので、いいと思う（2）					
先生がはじめから正解を言うのではなく、個人や班で考えて、先生は手助けや補足をするという形式は自分自身で考えるので学習意欲が増した（5）					
グループ内での話し合いが多くあるので、いろんな意見に触れることができるので良かった					
グループでの話し合いが役立っています（2）					
班での議論中に、先生が一つ一つの班を回って、コメントやヒントをしてくれたこと（10）					
ディベートの中で、グループ内で出ていた意見とは違った視点で、「～といった点ではどうか」といったことを投げかけてくれたことによって、違う視点から見ることができ、考えが深まった。					
先生のグループワーク中の誘導が上手い					
発表後の一言コメントに良かった点だけでなく、改善点の両方をふまえるようにする（2）					
クイズ					
クイズ形式が楽しかった（7）					
難民クイズの解答形式の効率が悪かった。もっと手際よくできたのではないか（2）					
資料					
プリントも詳しく書いてあるし、新聞の切り抜きとかがあるので実際の話がわかります（6）					
レジュメがわかりやすい					
授業内容					
アンゴラ難民についてのビデオを観たこと。やはり、難民が生じる環境というものは漠然とした想像しかできなかったので、ビデオで、難民の人々にインタビュー（どうして逃げてきたのかということに関して）していた場面が、生の声が聞けて良かった（6）					
講師と生徒の知識理解の差をもう少し考慮してほしい（授業内容がよく理解できない）（3）					
話し合う課題が抽象的過ぎるときがある					
質問が漠然としている（3）					
時々答えが曖昧なところ（日本で受け入れている難民の数とか）					
問題が難しい					
本日説明されていた「国益＝日本にいいこと」[益]という字はやはり利益を想像してしまうので、避けていただきたかったです。					
授業時間外学習					
宿題がほとんどない点					
（難民についての知識について）予習だけに知識をまかされる点→ある程度、全体での説明がほしい（5）					
時間配分					
毎回のプリントに今日することや時間配分が明確に示されていて取り組みやすい（3）					
プリントで授業内容・時間配分を示してくれていること（4）					
グループ発表などで時間が押した時に、コメントカードを今日はそんなに書かなくていいよ、ということを言ってくれた点					
授業に入るまでの前置き（説明）の話が長い					
説明が長いときがある（プリントを見ればわかる部分は、口で言わなくても大丈夫かも）（2）					
グループ発表の時間配分を気をつける					
グループ毎発表の後、各班のコメント＋先生のコメントがもう少し多くあればいいなと思う					
終わりの時間がおしている（余裕がない）点（10）					
ミニレポートの時間をもっと長く（5）					
授業の雰囲気					
「どんな発言も肯定的に受け取って～」という言葉が、発言しやすい雰囲気を作っている（3）					
発言することが大切、元気な人大歓迎、他者の意見を聞く（という先生の言葉）（2）					
どんな考えも否定せずに受け入れたくれた（3）					
考えを決めつけない					
自分の考えが言いやすかった					
「真剣に、でも肩の力を抜いて」という方針はとてもわかりやすいし、積極的に授業に参加できると思う					
堅くならずに気楽に学習することができました					
教員の熱意・人柄					
先生のやる気がこちらにも伝わってきて、とても授業を受けやすい。頑張らなくては、と思う。					
生徒より早く教室に来て、授業準備している（7）					
先生の話し方、態度とかが友好的・協力的					
固定観念がなく、常に世界中の人のことを考えていて、尊敬した					

担当コンサルタント：城間祥子　©愛媛大学教育・学生支援機構　教育企画室

科目番号：２０３２２	科目名：現代社会の諸問題
担当教員：平尾　智隆	
開講時期：後学期火曜日１限	受講者数：７

「ライフ・ヒストリー・インタビュー」

この講義は，学生が愛媛の仕事人のお話を聞き・質問し，インタビュー術を学ぶとともにキャリア形成の課題を理解することを目的に開講された。社会人の人生を聞き・話すことで，聞く力・話す力を向上させ，質的調査技法の取得を目指すと同時に，先達のキャリアを詳しくきくことで，自身のキャリア形成の課題を認識することを目指す。

講義名：ライフ・ヒストリー・インタビュー
開講日：火曜日１限目（08:30～10:00）
教　室：愛媛大学 城北キャンパス 愛大ミューズ 3 階 33 教室

講義スケジュール：
11/06　ガイダンス
11/13　アイスブレイク・ライフラインチャート
11/20　コミュニケーションゲーム（サバイバルゲーム）
10/27　インタビュー練習
11/10　社会人の講話（聞く練習）
11/17　社会人の講話（質問する練習）
11/24　社会人の講話・インタビュー①
12/01　社会人の講話・インタビュー②
12/08　社会人の講話・インタビュー③
以後は文字お越し作業，学生の振り返り実習

社会人の皆様にお願いしたこと：
1. ライフラインチャートを講義日の 10 日前までに記入。ライフラインチャートをもとに学生が質問を考える。
2. 講義日当日は，30～40 分程度ライフラインチャートをもとに自身の人生・キャリアを語って頂く。その後，学生との質疑応答を行う。
3. 講義日当日の語りは IC レコーダーで録音した。また，その文字おこしを学生がおこなう。

インタビューの手順

□アポとり
インタビュー対象者にインタビューのお願いをするのが，インタビューの最初です。コネやネットワーク，あらゆる情報網を駆使してインタビュー対象者との接触を試みます。同時に日場所の決定。
（今回の例：知り合いの知り合い，共通の知人に紹介してもらう）

□インタビューの内容説明
何をどれくらいの時間で聞きたいのかをインタビュー前にインタビュー対象者に説明する。必要ならこちらが資料を作成する。あるいは先方にいくらか用意してもらう。
（今回の例：お願い状を送付の上，自己年表・ライフラインチャートを記入してもらう）

□リマインダー
インタビューの日が近づいてきたら，先方に再確認。リマインダーを送る。
（今回の例：一週間前にメールでリマインダーを送る）

□場所の確保
インタビューする場所を確保する。先方の指定場所，両者が行きやすい場所，インタビュー対象者に来てもらう等の選択肢があるが，インタビュー対象者の意向を優先する。話のしやすい静かな場所を設定する。
（今回の例：授業なので大学の教室。会議室を確保。）

□機材の用意
IC レコーダーやビデオを使用する場合は用意する。録音や撮影の許可は事前に取っておく。録音は人によっては嫌がられる。また記録が残ることを嫌いいろいろ話をしてくれないことも起こりうるので，使用は時と場合による。
（今回の例：IC レコーダーを使用）

□インタビューの実施
万人にとってよい（印象に残る）インタビューはとても難しい。インタビュー講師アンケート参照。

□記録の整理
録音したものの文字おこし。メモの整理。記録として整理する。

□記録のフィードバック・お礼

科目番号：２０３２６	科目名：現代社会の諸問題
担当教員：藤目　節夫	
開講時期：後学期金曜日２限	受講者数：２０

2009年度　創生授業報告書

「20326　現代社会の諸問題」

藤目　節夫（法文学部）

１．授業題目
とっておきの松山観光プラン

２．履修者数 20 名

３．重視した教育目的
観光をテーマに、グループによる地域調査を実施し、それをもとにして独自の観光プランを作成し発表することを通して、地域を調べる力、考える力、企画する力、さらにはそれらを簡潔にまとめ発表する能力を養う。

４．設定した到達レベル
1)文献調査、ヒアリング、現地調査などの、地域の調査手法が使えるようになる。
2)収集した情報を整理し、マップなどに表現する方法をマスターする。
3)情報やマップなどを活用して、独自の魅力的な観光プランが作成できるようになる。
4)観光プランをわかりやすく説明するためのプレゼンテーション能力をマスターする。

５．授業を進めるにあたって特に留意した事柄
　受動的でなく能動的に授業に関わらせるため、グループ別に課題を与えて作業などを実施させた。また、グループ内での個々の学生の役割を明確にさせ、よくありがちなグループ内の一部の学生のみが努力するような状況を排除する試みを行った。さらには「地域から学ぶ」をモットーにフィールドワークを重視した授業を実施し、これについても全ての学生が関わるようにするため、個々の学生のフィールドワークの実態をチェックした。また、地域に対する基礎的知識を学んだ後にフィールドワークを実施させるために、山野芳幸『道後・城北界隈はええとこぞなもし』を全員に配布し、内容に関してレポートを提出させた。

６．学生の反応
一般の座学による授業に比較して、フィールドワーク、調査結果のまとめ、そして報告と、学生にはかなり負担の多い講義であったと思うが、20 名の学生が最後まで受講した。授業の最後に無記名、自由記述のアンケートを実施したが、自分

たちで計画を立て、調査をし、まとめて、そして発表する講義形式に対して、ほぼ全員の学生が極めて高い満足度を示した。また、学生には遅刻厳禁はもとよりかなり厳しく接したが、授業の方法を工夫し、学生の疑問に丁寧に対応することにより、厳しさもこれらとセットになれば学生に受け入れられることが分かった。

７．総合的判断

学生自らが地域に関する文献を調べ、地域をフィールド調査し、オリジナルの観光プランを作成し、発表するという講義は、学生の主体性を喚起し、座学では得られない学習ができたのではないかと判断する。

８．今後に向けた改善点

グループにより成果にかなりの差が出た。ある程度は仕方がない面もあるが、今後は途中経過をより詳しくチェックして、適切な指導をしていきたいと思っている。